アイルランド現代詩二篇

ポーラ・ミーハン
「砦に戻って」
アイリーン・ニクリャナーン
「捕獲」

（「アワルギンの歌」への応答）

訳・評釈　池　田　寛　子

アイルランド人の祖先とされるミレジアン族（The Milesians）の詩人アワルギン（Amergin）作とされる、次のような詩がある。原詩はアイルランド語である。「我」は自分が何者であるかを畳みかけるように列挙していく。

“I am a wind at sea,
I am a wave of the sea,
I am the roaring of the sea,
I am seven battalions,
I am an ox in strength,
I am a bird of prey on a cliff,
I am a ray of the sun,
I am an intelligent navigator,
I am a boar of fierceness,
I am a salmon in the river (or pool),
I am a lake on a plain,
I am an effective artist,
I am a giant with a sharp sword hewing down an army,
I am gods in the power of transformation.

In what direction shall we proceed?
Whether in the valley or mountain top shall we hold our council?
Where shall we fix our dwelling?
To what land is greater praise due than to the island of the setting sun?
Where shall we have our walks to and fro,' in fertile land with peace and safety?
Who can direct you to where the water runs clearest, in the rippling rill or at the water fall?
Or who can tell you of the age of the moon, but I?
Who can bring the fish from its recesses in the sea, as I can do?
Who can cause the fish to approach to the shore, as I can?
Who can change the hills, mountains or promontories as I can?
I am a Filea (Bard) who invokes to prophecy at the entreaty of seafaring men.

我は海の風
我は海の波
我は海の唸り
我は七つの軍勢
我は強い牡牛
我は崖の上の猛禽
我は一筋の日光
我は聡明な航海士
我は荒々しい猪
我は川の鮭
我は平原の泉
我は優れた芸術家
我は巨人　軍隊をなぎ倒す鋭い刃を有す
我は神々　変幻自在

我らはどちらに向けて進むべきか
政を行うのは　谷間か山上か
住処はどこに定めるべきか
日没の島よりも賞賛に値するのはどの土地か
肥沃な土地のどこを歩むべきか　心穏やかに
誰が最も清らかな水源へとお前たちを導くのか、さざめく小川や滝の水へと

誰が月の齢を教えてやれるのか、我以外に
誰が海の隠れ家から魚をおびき寄せることができようか、我以外に
誰が魚を岸に招き寄せるのか、我以外に
誰が丘を、山を、半島を自在に変える力を持つのか、我以外に
我は詩人　船乗りたちの願いを受け　予言する

Javelins shall be wielded to revenge the loss of our ships,
I sing forth praises and prophecy victory,
In ending my poem I desire other preferments which I shall obtain."[1]

詩人ロバート・グレーヴス（1895–1985）はその著書『白い女神』（*The White Goddess*）で、イギリスの詩の教育は『カンタベリー物語』でも『オデッセイ』でも『創世記』でもなく、この「アワルギンの歌」で始まるべきだと述べている[2]。詩人の神秘的な力とそれに対する自負をこの詩以上に端的に伝えることは難しく、アイルランド語を含むケルト語がイギリス諸島一帯で広く使用されていた時期があるからには、グレーヴスの主張にも一理あるだろう。

この詩は 11 世紀の写本として伝わる『侵攻の書（*Lebor Gbála Érenn / The Book of Invasions*）に組み込まれている。『侵攻の書』で展開されるのは、キリスト教到来以前のアイルランドに来寇した民族の光芒をめぐる歴史絵巻である。最後に到着したミレジアン族はゲール人（the Gaels）であるとされる。ミレジアン族が船でアイルランドに到着すると、そこには魔術に秀でたトゥアタ・デー・ダナン（Tuatha Dé Danann）がいた。戦いの結果ミレジアン族が勝利し、トゥアタ・デー・ダナンは地下に潜って妖精になったという。

「アワルギンの歌」は詩人が船から降りてアイルランドの岸へと右足を一歩踏み出したときに朗誦したとされる。内容は多層的で、さまざまな解釈が可能である。一つには、ミレジアン族がアイルランド島のありとあらゆるものの所有権を主張するための詩なのだろう。輪廻転生の信仰が背景にあるとも考えられる。過去は永遠の現在に含まれるという世界観を表現しているとも言われる。

1　Professor Connellan, ed., *Transactions of the Ossianic Society Vol.V* (New York: Johnston, 1857), pp. 235–36.

2　Robert Graves, *The White Goddess: A Historical Grammar of Poetic Myth* (Farrar, Straus and Giroux), p. 9.

槍は振るわれるだろう　我らが船の喪失に報いるために
我は賞賛を歌う　勝利を予言する
詩を終えるにあたり　我は所望する　得てしかるべきその他の物を。

人と自然との一体感を伝えるこの詩には、エコロジーの精神が現れているとも指摘される。自然支配への欲望が色濃く表れた後半部からは、万物の中心に人を位置づけようという野望もうかがわれる。

これまでアイルランドの詩の教授（Ireland Professor of Poetry）を務めた詩人のうち五名がこの詩への応答として新たな詩を書き、全員の作品が小冊子にまとめられている[3]。今回訳出したのはポーラ・ミーハン（Paula Meehan, 1955–）とアイリーン・ニクリャナーン（Eiléan Ní Chuilleanáin, 1942–）の詩である。詩人たちの許可を得て原詩の掲載が実現した[4]。アイルランド最初の詩人アワルギンの歌は、アイルランドの遠い過去についての想像力を掻き立てるのみならず、アイルランドを越える契機を内在させている。二人の詩に刻まれているのは、人とこの地球の関係をめぐるそれぞれの深い瞑想の痕跡である。

Meanwhile Back at the Rath

Paula Meehan

I

I walk through the gathered children, listening:
strange news come last night with the turning tide.
I dream the shape of what the new tide brings ——
taste of copper, the salty taste of blood.
The last light of winter. A blackbird sings.　5
I crawl on my belly to meet our dead,

3　Paddy Bushe, *Amergin: Unde Scribitur. Antiphona* (An Coireán, 2018).

4　'Meanwhile Back at the Rath'by Paula Meehan is reproduced by kind permission of the poet.'The Capture' by Eiléan Ní Chuilleanáin from *Collected Poems* (2020) is reproduced by kind permission of the author and The Gallery Press. www.gallerypress.com.

砦に戻って

ポーラ・ミーハン

I

集う子どもたちの間を歩く　耳をそばだてながら。
奇妙な知らせが入る　昨夜　潮流が変わってから。
私は夢に見る　新たな潮がもたらすもののカタチ ——
銅の味　血の塩味。
冬の最後の光。クロドリが鳴く。
私は這いつくばって進み　我らが死者を出迎える

into the stone heart of the rath, daughter
of water, remembering the future.

II

I light the fire. I blow the wood to flame.
I scry the boats turning before the wind.　10
A snatch of song, I nearly catch a name,
noise and tumult as they close with the land.
They step ashore, they estimate the game,
then the hearth spews smoke and I am blind.
The fire dies down, I scan the corbelled roof　15
that spirals me home to my time, my truth.

III

Lit by the first new moon of the new year,
a slender lantern in the starry black
I went to the well of the mad for cure,
the wind like ice on the nape of my neck.　20
Hoarfrost sprangled silver birth, lake water
mirrored willows, alder, each falling flake
of snow that settled on the sleeping swans
tucked up in their feather beds of down.

IV

In our stories there's a woman whose feet　25
are the wrong way round. When she's coming close
it seems she runs away. It's hard to meet

砦の石の心臓の深部へ
水の精の娘よ　未来を思い出している

II
私は火を焚く。息で木片を炎に変える。
私は占う　風を受けて向きを変える船団の意味を。
流れる歌をひとつかみ　捕まえかけた名前
騒音と騒動　やつらは陸に近づく。
岸に上がる　獲物を物色する
炉が煙をまき散らし　私は何も見えなくなる。
炎が収まる　層をなす天井屋根を凝視する
私は渦の中に放たれ　私の時代へ私の真実へと回帰する。

III
新年の最初の新月
星降る闇に浮かぶ　細身のランタンに照らされ
私は向かった　狂気を癒す泉へと
氷のような風が　首根っこに触れる。
銀の白樺に白霜のスパンコール　湖水に映る
柳　ハンノキ　雪のかけら　次から次へと
まどろむ白鳥に降り積もる
羽毛のベッドにくるまれた　白鳥に。

IV
我らが物語にはひとりの女　彼女の足は
逆さまについている。だからこちらに迫ってくると
走り去っているように見える。彼女に会うのは至難の業 ——

her —— dangerous to see her golden face.
There are riddled meanings few can translate;
our words are birds, they fly, they leave no trace.
We *ask* creatures to tell us what they're called; 30
that is the way we've learned to name our world.

V

I see desire for appropriation
of all we hold dear, of all we value,
I see you swagger, lords of creation:
you'll claim *this* river, *this* mountain, *this* blue 35
eternity —— its pronunciation,
its very breath in mouth, be food for you.
Must we who ask each sacred thing its name
now learn to live the shadow of your shame?

VI

If there must be reckoning, let it be
here beside this winter hearth, migrant birds 40
honking overhead. You, stranger, might see
the self-same images in flames. Though words
may fail us, let's start with the word for 'free',
and dream the trails it might point us towards.
Your hand in my hand as earnest of trust, 45
not because we want to —— because we must.

その黄金の顔を見るのは危険。
一握りの人にしか読み取れない謎がある。
我らが言葉は鳥　跡形もなく飛び去る。
生きとし生けるものに*問う*　お前たちは何と呼ばれているのかと。
そんな具合に我らは　世界の名づけ方を学んだ。

V

私は見る　横取りをたくらむ者の欲望を
我らが慈しみ　大切にしてきたものの横領の意志を
私は見る　お前たちが威張って歩くのを　創造主のつもりか。
所望するのか　この川　この山　この紺碧の
永遠を ── 言葉を発すること
言葉を運ぶまさにその息　それがお前の糧となる。
あらゆる聖なるものにその名を尋ねてきた我らは
学ばねばならぬのか　お前たちの恥の影を生きる術を。

VI

交渉が必要ならば　それは
この冬の炉のそばがよかろう　渡り鳥が
頭上で鳴いている。よそ者よ、見るがよい
炎の中の瓜二つのイメージを。　言葉は
裏切るかもしれない　だが「自由」を意味する一語で始めよう
この言葉が我々に示してくれる道筋を夢想しよう。
お前の手が私の手の中にある　信頼の証拠として
我らがそうしたいからではなく ── そうせねばならないからだ。

VII

I see the Book of Invasions written:
a swarm of black bees, a flock of black sheep,
the finned, the furred, the feathered, frozen
for all time. In the scribe's scraped skin they sleep,
to quicken in my ink-filled bowl of bronze. 50
Stags of seven tines, salmon from pools, leap
from the briary script to my open heart,
blessing bestowed with each ancestral charm.

詩の語り手はトゥアタ・デー・ダナンの女性詩人である。この詩はミレジアン族に侵略される民族の側からの「アワルギンの歌」への応答である。

Section 1, l.5 「冬の最後の光」(The last light of winter)

冬至の日、アイルランドのニューグレンジの古代遺跡で、円形の墳墓の中心に向けて太陽の光が差し込む瞬間がある。墳墓内部の構造は、「砦の石の心臓」(the stone heart of the rath)(Section 1, l.7)や「層をなす天井屋根」(corbelled roof)(Section 2, l.15)に反映されている。紀元前3200年頃に建てられたとされるこの構造物がこの詩では砦として使われ、詩人と死者との交流の場になっている。

Section 2, l.16 「私は渦の中に放たれ　私の時代へ私の真実へと回帰する」(...that spirals me home to my time, my truth.

語り手「私」は詩の中で幾度かタイムスリップする。「私」に詩人ミーハンが重なる瞬間も織り込まれている。「私」は現代からトゥアタ・デー・ダナンの時代にやってきたミーハンでもあり、よって「未来を思い出」す(Section 1, l.8)ことができるのかもしれない。「私」は『侵略の書』が綴られた11世紀

VII

私は見る　『侵略の書』が記されるのを。

黒い蜂の群れ　黒い羊の群れ

鰭(ひれ)を持つもの　毛皮を纏(まと)うもの　羽ばたくもの　永久(とわ)に皆凍りつく。

筆記者の手で羊皮紙に刻まれ　皆眠る

インクを満たした我が銅の器で　よみがえる。

七つ枝角の牡鹿よ　水たまりの鮭よ

茨のごとき手書きの文字から抜け出し　開かれた我が心に飛び込め

それぞれの祖先の魔力を湛えた祝福の中へ。

にも姿を現す（Section 7）。

Section 4, l.29 「我らが言葉は鳥」（Our words are birds）

詩の空間を飛び交うさまざまな鳥は、現れては消える儚い言葉のイメージと重なる。ミーハンは文字を持たなかったトゥアタ・デー・ダナンの失われた神話や信仰に思いを馳せたのだろう。その断片と思しきものがこの詩には織り込まれている。

Section 4, l.30 「生きとし生けるものに*問う*　お前たちは何と呼ばれているのかと」（We *ask* creatures to tell us what they're called）

あらゆるものに名前を付ける権利が人間にあると思うことを「おこがましい」[5] と感じるミーハンの姿勢を読み取ることができる。

Section 6, l.42 「炎の中の瓜二つのイメージを」（the self-same images in flames）

ミレジアン族も侵略を受ける側になる日が来ることが暗示されている。

Section 7, l.53 「それぞれの祖先の魔力を湛えた祝福」（blessing bestowed with each ancestral charm）

詩を締めくくるのは、『侵略の書』で最後の戦いを争った二つの民族を包みこみ、双方と自らの繋がりを確認し、祈りを捧げようとする詩人のまなざしである。イギリスのアイルランド侵略と英語化政策は、ミレジアン族の子孫としてのアイルランド語話者たちに「言語変化」をもたらした。こうしてアイルラ

5　Paula Meehan, *Imaginary Bonnets with Real Bees in Them (The Poet's Chair: Writings from the Ireland Chair of Poetry)* (Dublin: University College Dublin Press, 2016), p. 61.

ンド語は英語の影となってひっそりと生き延びることになった。トゥアタ・デー・ダナンが目に見えない世界を生きる民になったように。

詩人の役目は失われているようでそうでないものに光を当てることなのだろう。「私」は古の書物のなかをうごめく動物、鳥、魚たちを召喚し、皆に息を吹き込もうとする。

The Capture

Eiléan Ní Chuilleanáin

I

First, I need help to make the frame, with wings
and a nose and a fail fin,
room for those thick-furred beasts
if they scramble up or settle out of the air,
and a crack to harbor seeds for a trail of leaves, 5

so when I leap away the horizon swings
in the far distance, the hills
are floating like smoke, the fields
and the valley exposed, then diving, the plane
flashing, and every hollow under the leaves 10

a life huddles listening for a note that stings
music into life, a song that jumps, that grieves.

II

Except that I am not the earth but a late map of this earth,
its hedges tacking me down, don't expect me
to race again. The yearly bands of children 15
at school under the hedges are memorizing
their alphabets and flexions and the distasnces
grow longer with every name called on the roll.

捕獲

アイリーン・ニクリャナーン

I

まず　フレームを作るために手伝って　羽と
鼻と尾びれを使って
毛むくじゃらの獣たちの場所
奴らが這い上がってきたり　空中から出現するときに備えて
フレームには裂け目も必要　種を隠しておけば葉が芽を出すから

私が跳んで逃げると　地平線が振り子のように揺れる
遥か彼方で　連なる丘は
煙のように浮遊し　平野と
谷が目の前に迫る　急降下すると　水平面が
束の間現れ　葉っぱに隠れた窪みには

命が潜み　身を寄せ合って耳を澄ませる
音楽に命を吹き込む一つの声に　弾ける歌に　嘆きの歌に。

II

私が地球ではなく　この地球の最近の地図で
生垣に縁どられているならともかく　そうでなければもう結構
また競走するのは。学年ごとに子どもたちが
生垣に隠れた校舎で　暗記に励んでいる
アルファベットや語尾変化を　声が遠のいていく
ひとりひとりの名前が読み上げられていくにつれ。

I could eclipse and cloud them with a wink
as there no room left in the passages of my brain 20
for every conversation between the slug and the leaf,

yet if I follow the slow air where it spreads tracking
the laboring boats across the oceans,
where it knocks at every door and pushes inside,
where it winds along roads in France beside 25
the daughters leaving home to serve strangers,
the sons in foreign fields the one holding
King Louis' hand on the scaffold as he prays,
the earth recedes.

Can they all be crammed and keyed, "the Irish race 30
through history," which terms do we lack, to hold
that frame together, and how can we see anything
without the frame?
If I am a screen flickering
between the four handpainted provinces 35
and the bricks and timber,
this roof that shelters me,

I should find the bits of the frame,
I should walk around them to see if
they could be matched awry, to a different plan, 40
then try if I can persuade them
to limp back over the hedges, and

あんなものは地球の影にして　ウィンクで雲隠れさせてやる
私の脳内の路には　もう隙間がないから
ナメクジと葉っぱの会話を全部聞いておきたいから

でも私がスローエアを追いかければ　音色はどこまでも広がって
大海原を横切って懸命に進む幾艘ものボートについて行く
あらゆるドアをノックして　押し入る
フランスの道をくねくねと進んで
知らない人の奉公に向かう娘たちのそばを通って
外国の戦地にいる息子たちのそばを通って
断頭台で祈るルイ一六世の手を握るあの人のそばも通って
そうするうちに　地球が遠ざかっていく。

あの人たちはみんな集められ、調律されて「一つの歴史を生きてきた
アイルランド民族」になるのだろうか　足りない用語は何　フレームを
成り立たせるために　何かを見ようと思えば
フレームなしというわけにはいかない。
　　もしも私がスクリーンで　はためいているとしたら
四つの手描きのプロヴィンスの境で
レンガと木材と
私を守るこの屋根

私はフレームの断片を見つけなければ
そのあたりを歩いてみて　確かめなければ
それらを曲げて合わせられるかどうか　違う設計図に沿って
それから試してみよう　説得すれば
生垣を越えて　戻ってくれるかどうかを

if then I'll feel the weight of the beasts
as they settle again along the mismatched wings.

鳥か、光か、大地か、風か。語り手「私」は次々と変身しているようだが、自分が何者なのかをはっきり教えてはくれない。「私」に自己移入していくことによって、読者は壮大な地球紀行が体験できる。アワルギンが歌う自然環境と「私」の一体感に呼応する形で、この詩では「フレーム」とその中にあるものの入り組んだ関係がイメージ豊かに変奏される。

l.1 「まず　フレームを作るために手伝って」(First, I need help to make the frame)(l.1)

「フレーム」(frame)は「獣」(beast)を囲い込む「枠」でもあり、獣たちの「骨格」でもある。「フレーム」の材料には、それが取り囲もうとする中身も使われている。よって、「獣」を入れるための「フレーム」には、「獣」を成り立たせるパーツが含まれている。「フレーム」には亀裂もあって、そこに種を入れておけば芽が出て「フレーム」に彩りを添える。「フレーム」は有機的に変化し続けるのである。比喩的なレヴェルでは、「フレーム」は物事を把握するために必要な枠組み、定義に相当する。「フレーム」が変わればその中に入るものも変わり、その逆も然りである。「獣」はアイルランド島を構成する「四つの手描きのプロヴィンス」(l.36)にも対応している。アイルランドはマンスター、レンスター、コナート、アルスターの四地域から成り、地図上では四頭の「毛むくじゃらの獣」が合わさってできているように見えるからだろう。詩の底流にあるのは、アイルランドを入れるにはどのような「フレーム」が必要かというアイルランドの定義に関わる問いである。

l.6 「私が跳んで逃げると」(so when I leap away)

このスタンザの「私」は「アワルギンの歌」に出てくる「一筋の日光」なの

そのとき私は獣の重みを感じるだろう
奴らが　ずれた翼にそって　もう一度出現するならば。

かもしれず、「猛禽」なのかもしれない。

l.13 「私が地球ではなく」(Except that I am not the earth)

「私」は自分が「地球」(the earth) あるいは「地図」(map) のどちらかであるかのように語っているが、その「私」が「競走する」(race) するとはどういうことだろうか。「地球」と「競走」という言葉が連想させるのは、大地を象徴するアイルランドの女神マハ (Macha) である。マハは双子を身籠っている時に王の馬との「競走」を命じられた。大地と一心同体であるマハが、大地を走って馬に勝つのは当然かもしれない。競争が終わったとたんマハはその場で出産することになってしまい、自分を辱めた者たちを恨む。

l.22 「でも私がスローエアを追いかければ」(yet if I follow the slow air)

ここからの「私」はおそらく風である。「スローエア」はアイルランド音楽の一ジャンルで、もともと歌詞がついていた曲であっても通常楽器のみで演奏される。このスタンザでは、さまざまな理由で海を渡っていくアイルランドの人々を、グローバルに広がっていくアイルランドの伝統音楽が追いかけていく。前のセクションの「調べ」(l.11)、「弾ける歌」「嘆きの歌」(1.12) も響いている。

l.27 「断頭台で祈るルイ一六世の手を握るあの人」(the one holding / King Louis' hand on the scaffold as he prays)

「あの人」とは、ローマ・カトリック教会の聖職者ヘンリー・エセックス・エッジワース (Henry Essex Edgeworth, 1745–1807)。フランス革命後のルイ一六世の処刑に立ち会い、王を称え、励ましたとされる。

ll.30–31 「あの人たちはみんな集められ、調律されて、『一つの歴史を生きてきたアイルランド民族』になるのだろうか」(Can they all be crammed and

keyed, “the Irish race / through history”）

「アイルランド民族」（the Irish race）というフレームに嵌るのが誰なのかは、フレームによって決まる。フレームとその中身の関係をめぐる政治的問題がここに浮上する。

l.35 「もしも私がスクリーンで　はためいているとしたら」（If I am a screen flickering）

自分が「スクリーン」であれば何ができるかを「私」は思っているようだ。薄く軽い「スクリーン」は弱々しく見えるかもしれないが、周囲の風になびくとしても風に同化することはない。「フレーム」とは違う役目が果たせるだろう。

l.38 「私はフレームの断片を見つけなければ」（I should find the bits of the frame）

「私」が「説得」して呼び戻し、「捕獲」しようとするのが、「北アイルランド」という名の特別な「フレーム」で囲われた「獣」であるという解釈が可能である。英国領「北アイルランド」は 1922 年に成立し、南のアイルランド共和国から切り離された。四つのプロヴィンスの一つである「アルスター」の大部分を占めるが同一ではなく、イギリス系プロテスタントの人口の多い地域に絞られている。「間違って、曲がって、ねじれて、不正に」といった意味の ‘awry’（l.40）という単語、「ズレた翼」（mismatched wings）（l.44）といったフレーズは、歪められた「フレーム」、すなわち、政治的意図に基づいた恣意的な行政区画を示唆しているようだ。先に挙げた女神マハは「アルスター」との縁が深いのだが、その「アルスター」は現在、アイルランド領と英国領に分けられているということになり、こうした融通の利かないフレームを嵌められた大地にはどこか痛々しいものがある。スクリーンのはためく「手描き」の絵としてのアイルランドとは大きな違いである。ニクリャナーンはイメージの世

界で自由奔放に遊びながら、アイルランドの歴史を通底する悲哀に満ちたスローエアに耳を澄ませているのだろう。

本稿は科研費（二一Ｋ〇〇三八七「トランスナショナルなコンテクストにおける現代アイルランド女性詩の挑戦と展望」）の研究成果の一部である。